

## ミュンヘンの幼稚園における異文化間教育の現在

Die Situation der interkulturellen Pädagogik in Münchner Kindergärten

船 越 美 穂

Miho Funakoshi

学校教育講座

(平成18年 9 月 5 日受理)

### Zusammenfassung

Die interkulturelle Pädagogik in Deutschland wird – als Reaktion auf die von fortschreitender Internationalisierung und Globalisierung hervorgerufene multikulturelle Gesellschaft einerseits sowie als Antwort auf Rassismus und Fremdenfeindlichkeit u.a. infolge einer wachsenden Zahl von Ausländern andererseits – richtiggehend seit den neunziger Jahren des vorigen Jahrhunderts in der Praxis angewandt. Anders als die Ausländerpädagogik der siebziger Jahre ist die interkulturelle Pädagogik nicht nur auf die Migrantenkinder, sondern auch auf die deutschen Kinder, d.h. sowohl auf die Angehörigen der Mehrheit als auch auf die der Minderheit gerichtet, denn eines ihrer Ziele ist „ein konstruktives Miteinander“. Die interkulturelle Pädagogik wird auch in Münchner Kindergärten als eine wichtige pädagogische Aufgabe verwirklicht. Basierend auf der Analyse eines Praxisberichtes einer zusätzlichen Erzieherin für interkulturelle Pädagogik in einem Münchner Kindergarten werden in der vorliegenden Arbeit der gegenwärtige Zustand und die Aufgaben der interkulturellen Pädagogik dargelegt. Dabei wird Folgendes deutlich: Es ist wichtig, dass die Erzieher zuerst eine emotionale Stabilisierung des Kindes anstreben, eine gute Beziehung zu dem Kind aufbauen und das Selbstvertrauen des Kindes fördern, und im Weiteren die Sprechfähigkeit der Migrantenkinder im Deutschen entwickeln und fördern, sowie den deutschen Kindern Gelegenheit bieten, andere Lebensweisen kennen zu lernen.

### はじめに

世界で最初の幼稚園は、フリードリヒ・フレーベル (Friedrich Fröbel 1782–1852) によって、1840年、ドイツのチューリンゲン州のバート・ブランケンブルクで誕生した。フレーベルは自らの教育施設に幼稚園 (Kindergarten) という名前をつけて、自然界の植物のように、幼児が個性と社会性を伸ばしていくことを希求した。フレーベルが幼稚園を創設した19世紀半ばのドイツは、プロイセンが権力を掌握した身分制の強い社会であった。しかし彼は身分、男女、職業、貧富、宗派、信条、思想の別にかかわりのない、すべての幼児

のための自由な遊びによる幼稚園教育を研究し、その実現に尽力した。だが、1848年の三月革命の失敗による反動体制のもと、フレーベルの幼児教育の理論と実践は、当時あまりにも先駆的で、彼の近親者や支援者の革新的な行動も影響して、プロイセン政府は幼稚園禁止令を発布した<sup>1</sup>。20世紀を迎えても、ドイツでは2回にわたる世界大戦、東西ドイツの分断と、1990年のドイツ統一といったように、激動の歴史を辿ってきた。その中でドイツの幼稚園はその時どきの政治や社会の影響を受けながら生きてきた。フレーベルが幼稚園を創設してから160年余り経った今、ドイツの幼稚園はどのような問題に直面しているのであろうか。

現在、ドイツの幼稚園が取り組んでいる重要な教育課題に、異文化間教育があげられる。筆者はこれまでいくつかのミュンヘンの幼稚園を見学したことがあるが、たいていの幼稚園には必ず移民の子どもが在籍しており、場合によっては全園児の半数以上を占めている。本論文では、ミュンヘンの幼稚園が取り組んでいる異文化間教育の現状と課題を明らかにする。まずドイツにおける移民の人口動向を明らかにして、外国人教育から異文化間教育へ発展した、ドイツにおける移民の子どものための教育政策の変遷を概観する。次にミュンヘン市教育委員会が提示している幼稚園における異文化間教育の目標と基本方針を紹介し、異文化間教育担当の幼稚園教師の実践報告を分析することによって、ミュンヘンの幼稚園における異文化間教育の現状と課題を探究する。

## I. 移民受け入れ国としてのドイツ

ドイツはヨーロッパ最大の移民受け入れ国である。ドイツの移民は二つのグループに大きく分けられる。第一のグループはいわゆる旧来の6つの労働者募集国出身の外国人労働者たちである。

旧西ドイツは1950年代から60年代に、戦後の高度経済成長期を迎え、その労働力不足によって、外国人労働者を募集した。1955年にはイタリアと「外国人労働者の募集に関する協定」が結ばれ、その後スペイン、ギリシャ、トルコ、モロッコ、ポルトガル、チュニジア、旧ユーゴスラビアとの間でも同様の協定が結ばれた。当時の外国人労働者は一時的な就業が前提であった。1973年のオイルショックを契機として外国人労働者募集は停止されたが、その後、労働者による家族呼び寄せによって外国人入国は増加した。

第二のグループは、ドイツ系の帰国移民者（Aussiedler）である。彼らは何世代にもわたって、当時のソビエト連邦の国々、ルーマニア、ポーランドで生活していた。しかし、80年代から90年代にかけての共産主義体制の崩壊によって、ドイツへの帰還が増大した。

この2つの移民グループによって、80年代には、ドイツの人口に占める移民の割合は、アメリカ、カナダ、オーストラリアのような伝統的な移民国より高くなった。さらに政治亡命者や戦争難民の受け入れによって、ドイツにおける外国人の人口は増加の一途をたどったのである。

ドイツの人口は約8250万人、そのうち外国人は

約730万人で、全人口のおよそ9%を占めている。これに加えて、ドイツ国籍を取得した元外国人が約150万人で、帰国移住者は約450万人いる。これはドイツの住民の約6人に1人が移住者か移民家庭の出身者であることを意味する。外国人の約95%がドイツ西部地域に住んでおり、とくに大都市のある地区によっては住民の30%以上が外国人である場合がある。出身国別に見ると、トルコ国籍を持つものが約180万人と最大である。次にイタリア人55万人、セルビア人およびモンテネグロ人が50万人、ギリシャ人32万人、ポーランド人30万人が続いている。その他の外国人として、クロアチア人、ロシア人、ボスニア人、ウクライナ人、ポルトガル人、スペイン人があげられる。そして100万人以上の難民が暮らしている。<sup>2</sup>

現在では、外国人の5人に1人が、ドイツで生まれた第二あるいは第三移民世代である。幼稚園や学校は、以上のような移民の増加と移民政策の影響を受けて、外国人の子どものための教育に取り組んできた。

## II. ドイツの異文化間教育の歩み

ドイツの学校では、外国人労働者の雇用と家族の呼び寄せによって、60年代以来、外国人生徒の数が増加した。外国人労働者の子どものための教育に関する連邦レベルでの取り決めは、1964年の常設文部大臣会議<sup>3</sup>の勧告「外国人子女のための授業」（Unterricht für Kinder von Ausländern）にまでさかのぼる。この勧告では、外国人労働者家族の流入にこたえ、外国人生徒にも就学義務が適用されること、および学校におけるドイツ語の促進と並んで、外国人生徒には母語を維持する権利があることが明記された。1971年には（1976年と1979年には改訂されている）、外国人生徒がドイツ語を習得し、ドイツの学校修了証を取得するとともに、母語の知識を習得する機会をも提供するよう勧告された。<sup>4</sup>

以上のように、60年代から70年代における外国人教育は、補償教育的な意味合いが強く、外国人の子どもの就学困難の原因を除去して、できるだけ早期に学校に統合することに主眼が置かれた。しかし同時に教育は、長い間、外国人の子どもたちをドイツに統合するべきか、帰還の準備をさせるべきかという点で明確な答えを出すことができなかった。その結果、統合と言語的・文化的アイデンティティの保持という二重戦略を発展させる

ことにつながった。外国人生徒は、一方では欠損を除去して、ドイツの学校に適應するべきであり、他方では、母国語の補習授業を受けて、帰還の能力を身につけるべきであった<sup>5</sup>。

ドイツでは、外国人労働者の募集停止と帰還のための報奨金制度を打ち出したにもかかわらず、外国人人口の増加はとまらず、80年代半ばには事実上、移民受け入れ国としての認識をもつに至り、外国人の子どもに対する教育の改革が論議された。さらに、外国人に対する人種差別や敵視が深刻な社会問題になったのもこの時期からである。1985年に常設文部大臣会議は、移住者との相互理解を促し、文化的な偏見にとらわれない対話を提唱した。1992年には、「寛容と連帯に関する声明」が出され、他の文化に対する尊敬と理解ある共生を支持する義務が勧告された。<sup>6</sup>

増大する国際化とグローバル化を背景に、多文化社会がもたらす状況に適切に対処するために、1996年の常設文部大臣会議は「学校における異文化間教育」(Interkulturelle Bildung und Erziehung in der Schule)を勧告した。勧告の中で、異文化間教育は、マジョリティとマイノリティに向けられた「建設的な共生」(ein konstruktives Miteinander)を目指す教育とされている<sup>7</sup>。異文化間教育(Interkulturelle Erziehung)は、これまでの外国人生徒のための教育(Ausländerpädagogik)とは異なり、ドイツ人生徒をも含めたすべての生徒を対象としている点で、一般教育としての側面を持つと考えられる<sup>8</sup>。勧告に示された「異文化間教育の目標」は以下の通りである<sup>9</sup>。

- ①自己の文化的な社会化と生活関連を意識する。
- ②他の文化についての知識を獲得する。
- ③他の文化的特性への好奇心、開放性、理解を発展させる。
- ④他の文化的生活形式や生活の方向づけと出会い、それらと根本的にとりくみ、その際不安を認め、緊張に耐える。
- ⑤見知らぬ人に対する先入見を知覚し、真剣に受けとめる。
- ⑥他者の異なっていることを尊重する。
- ⑦自己の立場を反省し、批判的に吟味し、他者の立場への理解を発展させる。
- ⑧ある社会ないし国家における共生にとっての、共通の基礎に関する一致を見いだす。
- ⑨異なる民族的・文化的小および宗教的帰属によって生じる葛藤を、平和裡に耐え抜き、共に取り決められた規則によって調停することができる。

ドイツの異文化間教育は、他者との交わりの能力を育成し、他の文化との出会いを豊饒化として経験することが目指されている。しかし、同時に見知らぬ文化との出会いは葛藤をも生み出す。異文化間教育の目標は、文化的相違がもたらす葛藤を克服することにも向けられる。生徒は異文化間学習によって、違っていることを理解し、共通性を認識し、偏見を除去し、克服することへと導かれなければならない。以上のように、ドイツの異文化間教育は、文化の豊饒化を経験するための出会いの教育と、違っていることから生じる葛藤を克服するための葛藤の教育という2つの方向性を合わせ持っている。<sup>10</sup>

ドイツにおける移民の子どものための教育は、初期の外国人教育から、共生の教育を経て、ドイツ人の子どもをも含めた異文化間教育へと発展した。このような教育の発展の中で、幼稚園は異文化間教育においてどのような役割を担い、実践に取り組んでいるのであろうか。以下、ミュンヘンの幼稚園における異文化間教育について明らかにしよう。

### Ⅲ. ミュンヘンの幼稚園の異文化間教育

バイエルン州の州都であるミュンヘンの町を歩いていると、多くの外国人に出会う。そして、自分も多くの外国人の中の一人に過ぎないということに気づかされる。バイエルン州の人口は1233万人で、そのうち、外国人は113万人である。州都ミュンヘンの人口は130万人で、外国人は26万人、全体の20%に及んでいる。幼稚園で外国の子どもの占める割合は、平均35%である。1999年の段階で、ミュンヘン市立幼稚園の全就園児は14656人、そのうちドイツ人の子どもは、9526人、あとの5130人は外国人の子どもで、全体の35%を占めている。その内訳は、トルコ人が2122人と最も多く、続いて、旧ユーゴスラビア人937人、イタリア人353人、ギリシャ人305人、スペイン人25人、その他1388人である<sup>11</sup>。以上の数字を見るだけでも、ミュンヘンの幼稚園や学校が異文化間教育に真摯に取り組む状況にあることは明らかである。

既述した1996年の常設文部大臣会議の勧告「学校における異文化間教育」(Interkulturelle Bildung und Erziehung in der Schule)を受けて、1998年4月1日、ミュンヘン学校委員会は異文化間教育の目標を以下のように決定し、ミュンヘン市議会で承認された。

「異文化間教育の本質的な指導目標は、自分と違う社会や文化を持つ人々と、開放的に、偏見をもたず、寛容の態度によって、建設的に連帯する社会的能力を発達させたり、強化することである。」<sup>12</sup>

ミュンヘン市教育委員会は、幼稚園における異文化間教育の実現のために、次のような目標と基本方針を打ち立てている。

#### (1) 異文化間教育の目標<sup>13</sup>

##### ① 子どもの情緒の安定を図ること

- ・子どもの特性を顧慮し、決断力と判断力を促進する。
- ・子どもの精神、身体、情緒、社会性の発達を促進する。
- ・家庭の生活様式や作法を幼稚園生活に取り入れる。

##### ② 異文化間の偏見をなくすこと

- ・見知らぬことに対処し、克服することを援助し、不安や偏見を真剣にとらえて、文化的対立に取り組む。
- ・意識的に、子どもの文化的背景に関する知識を習得することによって、子どもと親の行動の動機、期待の持ち方、役割認識をよりよく理解し、受け入れることができるようになる。
- ・文化的な問題が原因の仲間はずれや差別的言動に断固として立ち向かう。

##### ③ 言語能力の目標

- ・子どもたちのドイツ語能力の発達を援助し、促進する。
- ・バイリンガルの子どもの言葉を幼稚園の日常生活から排除しない。
- ・バイリンガルの子どもの言語発達と言語能力を、一言語の子どもの言語水準と比べて判定しない。

##### ④ 親との連携

- ・子どもの教育に際して、親と協力し、問題を抱えている親を援助し、サポートする。
- ・可能な限り、親を幼稚園の日常生活に参加させる。
- ・ドイツ人の親と移民の親が、互いにコンタクトをとって、理解し合えるように援助する。

##### ⑤ 教師による共同作業

- ・異文化間教育を教師会議でテーマにする。
- ・出来るだけ多く話し合い、率直な討論によって問題に対処する。
- ・お互いに支えあい、意欲を起こさせ、助言をして、グループ全体で取り組み、多様な考え

方に対しては、共感と寛容の態度で対処する。

#### ⑥ 地域との連携

- ・他の研究所と連携する。
- ・幼稚園を地域に開放し、出会いの場所として利用する。
- ・人種差別に反対し、少数者の権利のために行動する。

#### (2) 異文化間教育の基本方針<sup>14</sup>

- ・異文化間の遊びのグループを支援しよう。子どもは仲間を求めている。
- ・子どもが母語で自分の文化や言語について話す時には、耳を傾けよう。
- ・子どもたちの生活現実をもとに教育方針を決定し、実践のすすめ方を熟慮して、準備しよう。
- ・幼稚園のそのつどの子どもの文化を顧慮して、子どもの出身国の文化について知識を深めよう。
- ・文化的な偏見をなくす準備をするために、積極的で意味深い異文化間体験を作り出そう。
- ・子どもたちに他の文化や生活様式への好奇心と理解を発達させよう。
- ・子どもたちに共通の価値を感じ取らせ、認識させて、違いを許容し承認させよう。
- ・私たちは知識の伝達者ではなく、学習過程における提案者や同伴者になろう。
- ・学習や経験のプロセスの中で、異文化間教育を捉えよう。
- ・私たちの教育目標は、子どもたちの仲間関係づくりである。肯定的で尊重しあえる関係であればあるほど、子どもはいっそう進んで教師の提案を受け入れ、学習する。
- ・文化的な誤解を解き明かそう。
- ・見知らぬことは不変的なものではない。子どもの感情は、見知らぬものと感じることから、親しみを感じることに変化する。子ども自身のものの見方はあらゆる経験や出会いによって絶え間なく変化する。
- ・「外国人に出会うことは、自分自身に出会うことである」というEile・Wieselの言葉は、異文化間教育において再三再四、真実であると証明されている。
- ・異文化間教育は単に変化することを求めるだけではなく、お互いに理解することである。
- ・文化的に偏見のない教育は多様なものであり、個々の家庭や生活の状況、生活経験を顧慮しなければならない。

- ・異文化間教育では、子どもと親に発言の機会を与え、可能な限り協力と決定に関与させる。
- ・異文化間教育では、葛藤が生まれうること、しかしそれは話し合われ、解明され、忍耐されなければならないことを学習する。
- ・異文化間教育では、理解することこそが有効な手段である。
- ・違っていることは当たり前のことである。
- ・教師集団は連携して取り組む。
- ・私たちと違った役割分担、年長者に対する尊敬の態度、育児の仕方を受け入れる。
- ・子どもたちが外国人に親しんで、高く評価し、それを伝えることができたならば、外国人排斥の根を絶つことになるだろう。異文化間教育は人種差別と外国人排斥に反対する教育である。
- ・国籍に対して型にはまった考えを容認しない。

ミュンヘン市教育委員会によると、ミュンヘンの幼稚園に在籍している子どもたちの国籍は30カ国にまで及び、とくに移民の子どもの多い幼稚園には、異文化間教育担当の教師が派遣されるシステムになっている。

2005年7月21日の南ドイツ新聞では、異文化間教育担当の教師、アンドレア・フォン・シュテンゲル氏の保育が紹介された。シュテンゲル氏の幼稚園では、60%の子どもがドイツ語を全く知らないという。75人の子どもたちの国籍は23カ国に及び、6人だけがドイツ人であるという。しかし、シュテンゲル氏は、この状況を不安に思っていない。彼女は「ドイツ語のできない健常児においては、条件さえ整えば、幼稚園の2年間で、十分なドイツ語を獲得する可能性がある」と言っている<sup>15</sup>。さらに「言語能力と社会性は共に作用しあう。子どもは相互作用—会話や共同遊びによって、最もよく言葉を習得する」と述べ、言語教育だけを取り出すのではなく、さまざまな遊びや活動の中で、子ども同士の仲間関係を励ますことによって、言語能力を発達させようとしている。

ミュンヘン市教育委員会には、異文化間教育担当のスタッフがあり、各幼稚園の相談に応じている。異文化間教育の普及と移民の子どものドイツ語能力の促進のためには、移民の子どもの幼稚園就園が求められる。ミュンヘン市教育委員会では、英語、フランス語、ギリシャ語、イタリア語、クロアチア語、セルビア語、スペイン語、トルコ語による幼稚園案内を発行し、移民の親のための電話相談に応じている。

#### IV. 異文化間教育の現在—実践報告から考える—

ミュンヘン市教育委員会が示した、幼稚園における異文化間教育の目標や基本方針にもとづいて、幼稚園現場ではいったいどのような保育が展開されているのだろうか。ここでは、ミュンヘン市教育委員会に所属し、異文化間教育担当教師として幼稚園にも勤務するパウラ・ツイントゥル氏の実践報告によって、ミュンヘンの幼稚園における異文化間教育の現状と課題について明らかにしよう。ところで、筆者はすでにツイントゥル氏の保育を実際に見学し、異文化間教育について話し合ったことがある。ここでは、ツイントゥル氏の書かれた実践報告とともに、筆者によって直接観察し、話を聞いたことをも必要に応じて紹介していくことにする。

ツイントゥル氏が勤務する幼稚園には、多くの移民の子どもが在籍しており、全体の72%（そのうち50%がトルコ人）を占めている。子どもたちの大半は幼稚園入園時にはわずかなドイツ語の知識しか持ち合わせていなかった。ツイントゥル氏は、幼稚園における異文化間教育を実践するに際して、以下のような観点を重視している。

##### (1) 小グループによる活動

異文化間教育の基本を子どもの情緒の安定を図ることにおいているツイントゥル氏は、幼稚園入園によって親から分離する子どもたちが、できるだけ肯定的な経験ができるように働きかける。氏は次のように述べている。

「子どもたちが、私によって尊重されていることを感じるのが大切です。私は彼らのあるがままを、彼らの言葉を、彼らの生活様式を受け入れ、彼らに会えて嬉しいことを示します。一人ひとりの子どもと、愛情のこもった関係をつくるのが私の目標です。ゲーテの言葉にあるように、『人は、愛する者からのみ学ぶ』ことができるのですから。」<sup>16</sup>

子どもたちの情緒を安定させ、幼稚園が居場所であると実感できるように、氏は小グループを編成して一人ひとりにていねいにかかわっている。氏は異文化間教育の実践のための拠点として、幼稚園に小さな部屋を用意し、くつろげる家具調度と装飾を施している。この部屋に来ると、さまざまな国、言語、生活様式が経験できるので、子どもたちは「外国の部屋」という名前と呼んでいる。この小さな空間で、たとえばいろいろな言語で指

人形遊びをする。ツイントゥル氏によれば、クラスで活動に参加する際に見られる気後れや不安が、この小さな部屋の中では取り除かれるのである。小さなグループで自信をもった子どもは、クラス全体の中でも、自分の場所を見つけて、いろいろな活動に取り組めるようになる。ツイントゥル氏は次のエピソードを紹介している。

「5歳のZübeydeというとてもおとなしい少女は、小グループの中で、運動と歌をたいへん楽しんでた。私は子どもたちをクラスへ連れ戻してたずねた。『今、何をしていたのかを、他の子どもたちにも教えてあげない?』私たちが驚いたことには、Zübeydeは部屋の真ん中に立って、歌をうたい、クラスの友達の前で踊ったのである。」<sup>17</sup>

幼稚園が安心できる居場所のように実感できるようになると、子どもは情緒が安定し、興味や好奇心が旺盛になって、いろいろな活動に挑戦する意欲が生じる。異文化間教育の実践では、まず第一に、幼児の情緒の安定を図ることに取り組まなければならない。小グループでの保育は、情緒の安定、異文化間の集団づくりや友情の促進にとって、有効であると考えられている。

## (2) 環境づくり—生活に関連した物への関心—

幼稚園に備える調度品も子どもの情緒の安定に貢献する。ツイントゥル氏の実践報告から三つの事例を紹介する。

### ① 5歳のトルコの少年

「私（ツイントゥル氏一筆者）は異文化間教育の研修旅行先のトルコから真珠で飾られた布を持ち帰り、『異文化間の部屋』（前述したように、子どもたちは外国の部屋と呼んでいる一筆者）の壁に飾った。5歳のEmirhanが最初にこの部屋に足を踏み入れた時、この布を見つけて近づき、手でやさしくなでた。そして振り返って私に笑いかけと言った。『僕のAnneも!』この布は、彼が幼稚園に適應するのを助けた。布は母親を思い出させたからである。次の数週間、私は何度も、どのようにして彼が布の前に立って、やさしく触れるのかを傍で観察した。」<sup>18</sup>

### ② 5歳のアフガニスタンの少年

「異文化間教育担当の教師は、金メッキを施さ

れた塔とドームの入った木製の積み木を準備している。この積み木によって、宮殿やモスクを建てることのできるからである。両親がアフガニスタン出身のおとなしい5歳の少年Sekrejaは、クラスの数人の友達と一緒に積み木遊びをしていた。彼は積み木の一部を脇へ運び、それを材料にしてモスクを建てた。彼はそれが完成した時、作品の隣に座って祈りをはじめた。他の子どもたちは静かに好奇心をもって聞き入っていた。彼の祈りが終わった時、子どもたちは質問をし、興味深い会話が続いた。」<sup>19</sup>

### ③ 5歳のギリシャの少年

「私はさまざまな国の風景が撮影されているポスターを集めている。私が子どもたちとポスターを観察していた時、Nicoが突然、大声で叫んだ。『それはギリシャだ! 僕の家と同じだ。僕は父さんとボートで海へ行ったよ!』ポスターは実際、ギリシャの海岸地域を示していた。Nicoは私に質問した。『それ、もらっていい?』私が彼にプレゼントした後、彼はポスターを持って、すべてのクラスへ行って、子どもたちと教師に『彼のギリシャ』を見せた。ポスターは、彼が最も気に入っているクラスの積み木コーナーの壁に貼られた。彼が2001年7月に家族とギリシャへ戻ったとき、ポスターを思い出として持ち帰り、私を招待した。そして『一緒に海で泳ぎましょう』と約束した。」<sup>20</sup>

ツイントゥル氏は、情緒の安定を図るために、子どもの生活に関連した物を用意することを心がけている。筆者が以前に異文化間の部屋を訪問した時には、幼稚園の移民の子どもを主人公にした、手作りの絵本が展示されていた。この絵本は、市販の異文化間教育の教材本を参考にして作られたものである。絵本の中で、移民の子どもと家族が紹介され、出身国の文化が写真や絵によって表現されている。絵本は主人公の子どもとの共同制作である。絵本を作成した理由は、既存の教材本では紹介できる国に限られており、幼稚園の子ども出身国に対処しきれないからである。そして何よりも、移民の子ども一人ひとりのための絵本は、保育者による子どもの個性と出身国の文化への尊重の証でもある。教材や遊具を含めた環境には、保育者の教育観や願いがこめられている。ツイントゥル氏の環境づくりは、一人ひとりの移民の子どもたちを尊重した、情緒的安定を大切にしている。

### (3) 幼稚園生活に母語を含めること

ツイントゥル氏によれば、さまざまな母語を幼稚園生活に含めることは、移民の子どもの情緒の安定と言語意識の促進に役立つという。例えば、朝の集まりでのあいさつをドイツ語だけでなく、子どもたちの母語でも行ったり、ドイツ語の歌や遊びとともに、外国語の歌も取り入れたり、絵本を多言語で読むなどがあげられる。氏は外国語のカセット、ビデオ、絵本を揃えている。しかし、ドイツ語の習得を最優先するべきだとして、同僚や子どもの母親からは異議の声もあるという。しかし、ツイントゥル氏は子どもたちが母語を受け入れられたとき、いかに情緒が安定し、自信に繋がるかを実践の中で確認している。情緒の安定と自信は、以後のドイツ語学習にもよい影響を及ぼすと考えている。氏は次のように二つのエピソードを紹介している。

「私はクラスで、子どもたちとドイツの挨拶の歌をうたい、続いて、ある母親が教えてくれたトルコの子どもの歌をうたった。子どもたちは驚きと喜びの反応を示した。トルコ語を話せる子どもたちはその歌を知っており、大きな声で一緒に歌った。6歳の少女Aylinもその中の一人だった。翌朝、彼女は私の手をとって、母親のいる衣服掛けの所へ引っ張って行って、私を紹介した。『Anne, こちらはツイントゥルさんよ! 彼女はちょっとだけトルコ人で、私はちょっとだけドイツ人よ!』」<sup>21</sup>

「6歳のTugbaは、トルコの絵本を、トルコ語で物語ってくれた。私は何も理解できなかったにもかかわらず、彼女の話に忍耐強く、静かに耳を傾けた。ひきつづき、Tugbaは自発的にその話を私のためにドイツ語に訳してくれた。」<sup>22</sup>

### (4) 子どものドイツ語能力の促進

ツイントゥル氏によれば、効果的な言語教育の条件は、教師との信頼関係である。子どもたちが信頼をもって、教師に近寄り、自発的に言葉でコミュニケーションをとるやいなや、子どもたちはドイツ語学習においても進歩が目覚しくなるという。教師に求められるのは、子どもたちのために話す気を起こさせる状況をつくることである。例えば、氏は週に何度か、子どもたちに指人形を使った役割遊びの機会を提供している。子どもたちは自分で話を考案し、遊ぶ際には気後れがなくなっているという。また、遠足も子どもたちの視野を広げ、語彙数を増やすという。年に何回か、氏

の菜園へ子どもたちを連れて行き、季節ごとの果物、野菜、花の成長の観察の機会を提供している。多くの移民の子どもたちは、庭のない高層アパートに住んでいるため、自然に触れ合う経験は貴重である。秋にはりんごや野菜を収穫して、幼稚園でケーキを焼いたり、野菜スープをつくったりする。子どもたちは五感で果物、野菜、花を理解し、活動の中で名前も認識できるようになる。

ツイントゥル氏は、既述したシュテンゲル氏と同様に、子どもたちに言語教育だけを取り出して教授するのではなく、いろいろな遊びや活動のなかで、子どもの情緒の安定を図り、社会性を育みながら、ドイツ語能力を身につけさせる方法をとっている。この方法は、ミュンヘン市教育委員会によって提示された異文化間教育の目標と基本方針にかなったものであり、異文化間教育担当教師としての経験によって構築された教育方法なのである。

### (5) 他の文化における生活様式を知ること

ツイントゥル氏は、グローバル化の時代の幼稚園の課題とは、子どもたちに多文化社会に対する準備をさせることだという<sup>23</sup>。子どもたちは、自分自身の生活様式は、多様なものの一つにすぎないことを経験するべきである。「見知らぬこと」を放置しておく、先入観や偏見をも生み出すことになる。幼稚園では他の文化や生活様式を知るための経験が折に触れて提供される必要がある。ツイントゥル氏の実践報告から事例を紹介しよう。

2001年4月23日、トルコ人の親の協力によって、幼稚園でトルコの子ども祭が開かれた。朝の9時に子ども、教師、トルコ人の母親がホールに集まり、トルコ語で歓迎の挨拶が述べられた。つづいて、トルコの子ども祭の起こりについての話を聞き、全員でトルコの子どもの歌をうたった後、クラスに分かれて、いろいろな遊びや活動を行った。たとえば、トルコの音楽とダンスを楽しんだり、母親の指導によってトルコの遊びをしたり、母親が作ったトルコの名物料理を食べることを経験した。この日、トルコ人の子どもたちは中心的な存在で、自分たちが受け入れられていると感じ、教師や友達の関心と尊敬を実感した。ドイツ人の子どもたちは、最初は「見知らぬもの」と感じていたものに、興味と好奇心を示すようになった。一日では理解することはできないながらも、子ども祭を共に祝い、遊びや活動に参加する中で、見知らぬ文化に対してささやかなイメージを持てるようになった。このような経験の積み重ねが、差別

や偏見に立ち向かう心を育てるのではないかと、ツイントゥル氏は語っている。<sup>24</sup>

異文化間教育担当の教師は、しばしば博物館や美術館を利用する。ツイントゥル氏も、子どもたちをトルコの生活文化を紹介した展覧会に案内した。展覧会の会場には、二部屋続きの住居が建てられており、お茶のセット、香辛料、生活用品、手芸品、コーラン、コーランを入れる鞆、礼拝用のマット等が展示されていた。子どもたちは住居の中で、自由に動くことができ、すべてのものを観察し、直接に触れ、多くの質問をした。トルコ人の母親が用意してくれた菓子を、居間でアップルティーと一緒に食べた。帰り道、6歳のセルビア人Dennisが言った。「ぼくもトルコ語を勉強したいな。そしてあんな家に住みたいな!」。<sup>25</sup>

おわりに

OECDのPISAの結果がドイツにとって芳しくない結果であったため、幼稚園教育の役割があらためて見直されている。小学校に入学する前に、移民の子どもたちにドイツ語能力を十分身につけさせるための有効な教育機関こそ幼稚園であると考えられている。バイエルン州はPISAの成績がドイツ全土で第一位であった。2005年に出された、バイエルン州の幼児教育に関する法律では、幼稚園における移民の子どものためのドイツ語教育の実施がさらに強く押し出されている。バイエルン州首相のシュトイバー氏は、バイエルン州の幼稚園教育プログラムを全ドイツで実施することを強く主張している。ドイツ語学習は小学校では遅く、幼稚園で行われなければならないというのである。

すでに紹介したミュンヘン市教育委員会の異文化間教育課所属の幼稚園教師、ツイントゥル氏は移民の子どもの情緒の安定を図ること、出身国の文化に誇りを持たせることに重点を置いている。彼女の保育はあたたく、子どものすべてを受容する包容力にあふれるものである。他の幼稚園の子どもたちに比べて、彼女のかかわっている子どもたちは確かに情緒的に安定し、落ち着いていた。PISAの結果によって、幼児教育の重要性を再認識したことは大いに評価できる。しかし、異文化間教育のこれまでの実践の積み重ねと、すぐれた教師の幼児教育方法を評価することがまず第一に必要である。幼児の言語教育がいつのまにか訓練になって、本来の幼児教育の本質をなおざりにしてはいけない。

フレーベルが幼稚園を創設してから160年余りを経て、ドイツの幼稚園の課題は大きく変化した。しかし、幼稚園(Kindergarten)にかけたフレーベルの思想と実践の本質は、幼稚園教師の実践の中で、今もかわらず生きている。それは、部分(個人)と全体(集団)が交流することによって世界が成り立つとした部分的全体の思想に支えられた、人間教育の実践なのである。最後にフレーベルの次の言葉で本論を結ぶことにしよう。

「私自身は部分的全体であり、人類は生命全体の部分である。そして私は人類の部分的全体である。だから私は人間であって、しかも生命全体を内にもっている完全な人間なのである。あたかも蕾がその本質と発展の全体性を内に秘めつつ樹木についているように、私は人類という生命の樹木についている一部分なのである。つまり私は、自分だけをとりだせば唯一のものであるがしかし孤立したものではない。ちょうど私のうちにも生きていてそして私の本質を形成している全体の生命のように、私は全体であってしかも唯一のものである。それゆえ私の最も内奥にある万物の生命を外部にあらわすようにすることが私の使命である。しかし私は全体の部分でもある。したがって私は部分であって同時に全体であり、人類の部分的全体である。」<sup>26</sup>

最後になりましたが、ミュンヘンの幼稚園における異文化間教育に関する貴重な資料を提供して下さいました、ミュンヘン市教育委員会のグレッチュ博士と、異文化間教育担当のツイントゥル氏に心よりお礼申し上げます。

<sup>1</sup> 幼稚園禁止令は、プロイセンによって1851年に発布され、フレーベルの死後1860年によく撤回された。幼稚園禁止令に至る事情については、岩崎次男氏が文献による厳密な分析をとおして、自由教団、フレーベルの甥たちとの関係から詳細に論じておられる。(岩崎次男『フレーベル教育学の研究』玉川大学出版部、1999年)

<sup>2</sup> ドイツ連邦共和国外務省『ドイツの実際』(“Tatsachen über Deutschland”

<http://www.tatsachen-ueber-deutschland.de/>)

<sup>3</sup> ドイツの学校は国家の監督の下、州によって管轄されている。各州の協力体制としては、常設各州文部大臣会議(Die Ständige Konferenz der



Kultusminister der Länder) が設置され、各州の教育政策を調整し、国家としての共通性の保持にあたっている。

<sup>4</sup> 天野正治編著『ドイツの異文化間教育』玉川大学出版部、1997 年、418 ページ。

<sup>5</sup> Landeshauptstadt München/Schul- und Kultusreferat: Qualität für Kinder – Interkulturelle Pädagogik – Pädagogisches Rahmenkonzept zur Weiterentwicklung der Kindergarten-, Hort-, und Tagesheimpädagogik(以下, Qualität für Kinder – Interkulturelle Pädagogik と略する。), 2000, S. 29.

<sup>6</sup> 天野正治編著『ドイツの異文化間教育』玉川大学出版部、1997 年、418 ページ

<sup>7</sup> 同上書、420 ページ。

<sup>8</sup> 天野正治、村田翼夫『多文化共生社会の教育』玉川大学出版部、2001 年、249 ページ。

<sup>9</sup> 江原武一編著『多文化教育の国際比較 – エスニシティへの教育の対応 –』玉川大学出版部、2000 年、135 ページ～136 ページ。

<sup>10</sup> 天野正治、結城忠、別府昭郎編著『ドイツの教育』東信堂、1998 年、264 ページ～265 ページ。

<sup>11</sup> Qualität für Kinder – Interkulturelle Pädagogik, S. 17 und S. 19.

<sup>12</sup> ebenda. S. 25.

<sup>13</sup> ebenda. S. 56.

<sup>14</sup> ebenda. S. 65-66.

<sup>15</sup> “Migrantenkinder – Die Sprache lernt man auch beim Spielen”, Süddeutsche Zeitung, 21.07.2005. (<http://www.sueddeutsche.de/>)

<sup>16</sup> Paula Zintl: “Sie ist ein bisschen türkisch und ich bin ein bisschen deutsch” (Aylin 6 J.) – Praxisbericht einer zusätzlichen Erzieherin für interkulturelle Pädagogik, KiTa spezial (Nr. 3/2001) ,Carl Link Verlag, 2001, S. 34.

<sup>17</sup> ebenda. S. 34.

<sup>18</sup> ebenda.

<sup>19</sup> ebenda.

<sup>20</sup> ebenda.

<sup>21</sup> ebenda. S.34-35

<sup>22</sup> ebenda. S.35.

<sup>23</sup> ebenda. S.35.

<sup>24</sup> ebenda. S.35.

<sup>25</sup> ebenda. S.35.

<sup>26</sup> 小原国芳、荘司雅子監修『フレーベル全集第 3 巻』玉川大学出版部、1977 年、524 ページ。

W. Lange(Hg.): Friedrich Fröbels gesammelte päd. Schriften. 1. Abteilung, Bd. 2. Faksimiledruck Osnabrück, 1966, S. 500-501.